

○評者の基本的な立場と評価

- 実証的な宗教社会学・質的な調査研究。社会構成主義・自己物語論の理論的有効性。
- 日本の宗教社会学史上、特筆すべき優れた成果。
- 記述の厚み・ボトムアップ式の議論・具体性・現在性・禁欲性。
- 相互行為への着目。マルチ・ディシプリンによる総合的な理解。非遡及的調査の遂行。

○真如苑を見る視点

- 伊藤真乗（1906-1989）が創唱した大般涅槃経を根本経典とする真言宗醍醐寺系新宗教。
- 1936年に創始されているが、1970年代以降に大きな伸び。
- 接心等様々な独自の宗教様式を確立している「信徒分有型の霊能教団」（寺田・塚田）。
- 接心修行（霊能者による〈浮かび系〉霊意指導）・智流学院（真如教学の修学機関）・経親（経＝擬制的親子関係による日常的指導）と弁論大会（地縁的年齢階梯組織による年一回の集中的指導）との有機的な連関による効果的な教導システム。

○日本の社会学的新宗教研究における質的調査に基づいた信者研究の主要な成果

- 高木宏夫（天理教・立正佼成会・霊友会・生長の家・世界救世教・創価学会等）、鈴木広（創価学会）、森岡清美（立正佼成会）、西山茂（妙智會・天照皇大神宮教・本門佛立宗・創価学会・立正佼成会等）、渡辺雅子（立正佼成会・妙智會・大本・金光教・自生会等）、孝本貢（霊友会等）、谷富夫（崇教真光等）、池上良正（津軽赤倉等）、井上順孝（創価学会等）、島藪進等（修養団捧誠会等）、磯岡哲也（立正佼成会等）、秋庭裕・川端亮（真如苑）等。

○真如苑研究

- 横山真佳（1978）、白水寛子（1978）、石井研士（1986）、沼田健哉（1990）、永井美紀子（1991,1993）、長谷千代子（1995）、秋庭裕・川端亮（2004）等。三土修平（1987）。

○分析素材の3レベル。全体社会・真如苑教団全体・個別の行事参加者。

- 一般論と対象限定論の差異。グランドセオリーと領域密着型理論。一般命題と条件命題。

○既存の研究への批判と乗り越え

- 真如苑研究という限定を取り払った貢献

○新宗教研究の今後の課題